昭和五十三年十一月二十七日

平泉　澄先生　午後の部(二)

○　品川主計さんとは昔からのお友だちですか。

平泉　福井の人で、連絡のない方だったのですが、福井県の育英事業で保仁会というのがあるんです。これは福井藩の重臣たちが考えて、将来福井藩の人材が東京で勉強していく上での補助をしてろうというので、土地を買い求めそこに塾舎を建てて運営をし、金のないものには貸貰制度を設けて、月に二十円程度の援助をするという仕組みになっておった。私は家は貧乏だけれども人の援助を借りることは好まないのでそれは受けなかったから、関係はなかったのですが、それの理事をしておったのが芳賀矢一先生。山本条太郎、これはあの時分の日本にとっては重大な人物ですわ。それで私は山本条太郎さんをよく知っておる。それから永井環は東京市の高級助役をして、あと福井市長になった。それから岡田啓介大将。これがみんな評議員んです。私のおじは岡田さんなどと同期生で、写真に出ている法科大学の島田剛太郎長崎県知事。これがみんな評議員だったんです。この連中がだんだん年寄ったので若手に代えようという案があって、全部やめて若手にしたんです。そのときに品川さんも選ばれ、私も選ばれた。そのときは鉄道省建設局長[工務局長]の加賀山[学]。

○　総裁になられた方ですか。

平泉　あれのおじ[兄]ですわ。総裁になったのはまだ学生で、わしは舎監をしておって、あれは貸費生。学生ではいま代議士で要職におるが福田一、わしの監督下におったんです。そこで品川さんと私とは理事になった。矢板さんというのは下野銀行の取締役、これは福井の橋本景岳先生は若いからお弟子は一人しかない。その一人のお弟子の息子が矢板さんで、栃木県矢板町の矢板という豪族のところへ養子にいったんです。そんなのが数名あと引き受けたんです。そこで品川さんとは懇意なんですがね。

品川さんはそのとき満州国監察院の次長で、院長は満州人ですが、実質は彼が院長ですわいな。ところがこの人は初めは満州国建設ということに反対だったんです。私は反対も賛成もないけれども、満州国の首脳の人たちと懇意だった。それでこの人が行くについてはそういう意味で私が仲良くしてもらう役を果たすことになった。三雲さんでもそうです。三雲さんは北支開発の支社長で、支社長といっても初めの北支開発なんていうのは絶大なもので満鉄に匹敵する、何ともいえん大きなものですよ。ところが非常に三雲さんは心配で、つまり陸軍が心配である。陸軍というのは何をするかわからない。横暴ですからどんなことが起こるかわからない。

それで三雲さんに、三雲さん、心配しなさんな、何かあったらおれは平泉の親友だと言いなさい、危急はそれで逃れる、あとはおれ

が飛んでいくという話をしたら、三雲さんは別にそんなものを頼りにもしないだろうが頼むぜと行ったんですが、そんな事情なんです。

満州では品川さんは家を建てている最中でした。それで品川さんに万事世話になって、満州国皇帝はまだそのときは皇帝とは言わずに溥儀執政ですが、溥儀執政が会うと言われてお会いしたんです。ところが私はモーニングがないので、品川さんにモーニングを借りてお会いしました。溥儀さんには執政でお会いし、その次は皇帝でご挨拶し、ご進講も申し上げた。三度お目にかかっていますね。

満州へ行く前に青々塾をたてました。その時分は時代というものを敏感に感じ取るのが感受性の強い学生なんです。上の先生方は何だかわからない。各学部のこれという有為の学生は、みんな私のところへ集まった。講義にも集まる。それから会としては朱光会もできるという調子でしょう。七生会とか、ほかの会とはどういう関係かということですが、主義主張というものはいろいろありましても個人的信頼というのが会のもとですから、それがなければどう動くのかわからない。そういうことで個人の信頼からそれぞれ集まる。上杉先生を信奉するものは上杉先生のところへ集まる。それから蓑田胸喜氏を好きなものはあそこへ集まる。私を信頼するものは私の周囲へ集まるということで集まって、講義でも定員がないんです。法規以外の聴講でだれも届けるものはない。理学部や工学部は届けてきたって受け付けようもないし、向こうの講義を休んでいるんだから表へ出せない。農学部でも何でもくるでしょう。朝行って見るととても教室へは入りきれないし、文学部だけで処置しきれない。そこでモーゼと同じで私は群衆を率いてあっちこっちへ砂漠をさまよわなければならない。もう少し大きい教室はないかというので交渉しては、その日その日で歩くという状態であった。

それで塾を欲しいということで、私の家は曙町十二番地、塾として借りた借家は二十二番地。これまた愉快で私の家からずっと行くと藤島武二さんという有名な絵描きさんの家がある。それからもう少し行くと寺田寅彦さんの家がある。もう少し行くと借家があるのを見つけたんです。それは入ったあとだんだんわかったんですが、実におもしろいことには婦人解放運動の先駆者、平塚雷鳥の家なんです。平塚という表札が出ておる。雷鳥はその家の娘だけれども若きつばめのところに出ておる。雷鳥の妹さんがおられてその方が奥さんで、ご主人は北海漁業の重役でお家にはほとんどおられません。雷鳥らのお父さんがおられましたが、これが有名なお方で錦鶏間祗候平塚定二郎。これは独乙協会大学というのがあるでしょう。あれのいちばん上ですよ。ドイツ語協会の先駆者です。この方の二番目のお嬢さんが家の跡をとってそこにおられた、その方にお願いして家を借りた。

その平塚さんというのは、有名なロエスレルを連れてきて通訳になった人です。これは日本の憲法をつくった人で、専門は商法です。私のほうから見ると『仏国革命論』を著した重要な人なんです。そこで初めて定二郎翁にお会いして、ロエスレルの話を聞きましたが、不思議な関係でそこを借りて、そこで八年四月初めに最初に開いて、初めに七名ですかいな。間もなく人が多過ぎるので、すぐに別の家

も借りて第二の私塾を開いて、そこで法、経、文、工、いろいろなにかきましたね、それでずっとやってきた。それが東京で三つ、四つ、千葉で四つ。工学部は千葉へ伸びた。あのとたんに千葉へ塾を四つやった。盛んなものだね。とにかく東大はやっぱり偉かったですね。就職の勉強のためにしておるのではない。日本の国をどうするか、この際われわれが奮起して日本の国を担うんだという意気込みで、みんな道を究めようとする、それですからこれはやれるんですね。それでみんな集まってきた。

京都は京都大学に塾をたてた。仙台は東北大学で仙台に塾をたてた。

○　それはみんな同じ名前の塾ですか。

平泉　そう青々塾です。

○　その第何塾という。

平泉　千一塾まできたんです。表へ出さんが、それは実に盛んなものだね。アメリカのほうがよく知っている。いったい私の仕事は日本人は知らない。いちばん知らないのは国史学科で、愚かなものばかりおって、研究室は私によってつくられ、千辛万苦してつくったところを占領して、私を悪者扱いにしておる。アメリカのほうがよく見ていますよ。この塾でもグリーングリーンスクールという、いい名前だね。それで千一塾。そのほかにもある。

○　それは名前が違うんですか。

平泉　名前が違う。いまの塾というのは学生が入っているほんとうの塾です。ほかのは例えば小学校の先生が集まるとか、そういうのは別に建物があるわけではない。一つの集まりの名前で、それがまた各地にずっとある。

○　最初に東京周辺にできた塾は、大体、東大の学生ですか。

平泉　原則として東大。京都はみんな京都大学。仙台は東北大学です。ただ例外的に東京の塾へ早稲田の人が一人入りました。これは特殊な関係で福井の人です。

○　塾の経営は独立しているわけですか。

平泉　はじめは私のほうで何もかもやったんですが、こっちは貧乏ですからとても賄うことはできない。それであるところまできてみんな各自負担する。そのうちに卒業生が出るから、そこで卒業生が後輩を見ていくということでずっと続いたんです。月給を貰ったら出せということになっているんです。

○　その塾で先生が講義をなさるんですか。

平泉　夜、一週間に一ぺん。

○　そんなにたくさん塾があったのでは。

平泉　それは回りはしません。講義のときにはみんな第一塾へ集まる。それぞれ塾頭は決めてあるから、塾はその塾頭によって統轄されていて、私の講義のときはみんな集まる。そのときは百人を越えますから、とても家の中には入れない。先にきたものはみんな座敷に座る。家中ぶち抜いて全部座って、もう席がなくなれば、むしろを敷いてみんな座る。それは盛んなものでどれだけ集まってもだれもわからない。つまり、声を立てるものは一人もおらない。静粛に極めて慎しんで集まってくる。きても黙って座る、それは一語を

発するものもない。

それから礼儀を尊ぶ。これは学問の根本なんです。礼儀が乱れたとき学問はそれでおしまい。だから、みんな非常に礼儀を尊び、慎んで承るということなんです。頭を上げるものもないという調子で、これは学問の本体です。それを厳しくいわれたのは山崎闇斎先生です。それは実にすばらしいもので、仙台の第二師団の将校で、若い将校などみんなくるんですが、元日の夜汽車できて、二日の朝東京に着いて塾へきて、十時からの私の講義を聴いて、そのまま帰って翌日から勤務する。それから海軍は横須賀に軍艦がきているとみんなくる。遠方からくる人々はみんな気の毒に座敷へ上がれないから、庭のむしろの上へ刀を横に置いて座る。それが一語も発しないでじっと座っている。咳一つするものもない。微動もしないでずっとこういうままです。それでずっとやってきたから、何ともいえず私も楽しかったが、みんなもあれで一緒の感激ですね。

それに反し来ないものは、正直なところいよいよ戦争になってから逃げ回る。戦争には行きたくないんです。なるべく行かないようにと骨を折ってみたり、それはよけいなことなんです。そして結局行ってもいやな思いで、聞けわたつみの声で泣き言をいわなくてはならない。国の運命ですから、われわれが国運を打開する、そのためには命を捨ててよいという態度ですから、見れば、この人は魂ができておるのかどうかはすぐわかる。どこへ行っても非常な尊敬と信頼とを得て、みんな苦労していますけれども満足である。そういうふうで塾はきたんです。

○　千一塾というのは昭和二十年段階のことですか。

平泉　もっと前です。もっとも陸軍の百三十五師団と同じで、中が抜けている。そのうち詰めるつもりでだんだん番号を打っていったところが、詰まらなかった。（笑）戦争が激しくなってそんな余裕はなくなってきた。

○　若い者もいなくなるということですか

平泉　若い者もいなくなるし、こっちの手もまわらない。戦争になると大変でしたからね。そこで跳ぶんですよ。初めはそういう予定で、さらに九州帝大も考えておるし、ずっと考えてあったんだけれども、そこまでいかなかったというわけです。

しかし、千一塾というのはおかしいようだけれども、出征の命令が出ると私のところへみんな挨拶にくる。千一塾、何のたれがしでございます、命を受けましてどこどこへ出動いたします。実に兆列でした。日本の若者にあんな見事な態度が玉成されるものかと思いました。あとは玉砕になりましたが立派だったですね。

昭和九年、満州国へ行くときに釜山で汽車に乗った。広軌だから汽車は大きいでしょう。寝台に乗ったが夜にならないので寝るには早いので腰掛けておった。向かいに腰掛けている人は陸軍大尉で、その人と話して非常に気持ちがあった。私はたいていの人は友だちになるか、敵になるか一目でわかる。今田新太郎という若い人などは汽車のプラットホームで会った。若いのに非常に壮快な人で、ちょうど鷹がにらんでおるようにこうしてにらんでおる。だれもほかに人はいなかった。それで私はこう見て、初めて会ったのでだれも

わからんが、今田さんだろうと思って、「今田大尉ですか」「そうです、今田大尉です」それで会って仲良しになった。これはいつも絣の着物で家へきましたが、先祖は大和郡山藩の槍奉行、山崎闇斎先生の学問を受け継いだ人で著書もある。お母さんが立派でしたね。この人など一目で仲良くなって、良く家へこられたですわい。辺幅を飾らない、いかにも陸軍の将校らしい、袴をぎゅっと短くはいて絣の着物で筒袖で、こういう人が非常に好きなんです、男らしい男がね。

汽車の中で一緒になったのは松村大尉で、これとそのとき話をして二人とも仲良しになった。それが縁を結んだんです。その人が今度は満州から帰ってきて、陸軍士官学校の教務課へ入った。そこで私に頼んできて、士官学校で講義をしてもらいたいという。不思議なことになんな因縁があるもので、それで行ったんです。

大講堂にずらっと生徒が入っておる。私はこっちから入って松村大尉の先導で進んで、こう行ってここで壇へのぼって正面の演壇に行くことになっておった。こう行ってこの壇へのぼろうというこの片隅に一人立っている人がある。だれか私は知らないんです。それが東条［英機］少将でその時分士官学校の幹事です。幹事というのは校長より大事で、一切は幹事において決する。私は何も知らない。大体、東条という人を知らない。この横を通るときに揖をして壇へのぼった。そのときに私は刀を持って行った。大刀をひっさげて行って、東条さんにちょっと会釈をして壇にのぼり、演壇上に刀を置いて話を始めた。

この刀は終戦後、人に預けてこちらへ帰ったものだから、預かってくれた人が進駐軍を怖がって、これを土中へ隠した。それで刀が少し崩れましたわい。文久二年十二月、二尺五寸、大刀ですわ。これをひっさげて行ったんです。そして壇上でこれを抜いた。陸軍よ、この刀のごとくにあれ。第一に強くあれ、戦争に負ける陸軍を見たくはない。戦えば必ず勝てり。いかなるものでも手向うものをたたき斬るその力を持て、弱き陸軍をわれわれは見る気がしない。この刀は何ものをもたたき斬るんだ。その武力を持て。第二に陸軍よ、その武力をなんじの私の意思によって発動するものではないぞ。陛下の勅命によって動け。私の意思を遮断するこの刀を見よ、ここに「山はさけ海はあせなん世なりとも君にふたごころわがあらめやも。」これは将軍実朝の歌ですが、すべては陛下によって決する、それ以外私の意思によって動かしてはならん。それはみんなが何とも言えぬ驚きだったんです。

当時はみんな陸軍を恐れておった。五・一五や満州事変からあとはそうでしたが、その陸軍に対して大喝一声これをやった。この刀によって私は陸軍というものを鍛え直した。世間の知らんものは、私が陸軍と結託し、また阿諛して威張っているようなことをいう。そんなものではない。陸軍が私を畏れ敬った。

これは土中に置いたために刃が崩れたんですが、明治維新直前の日本精神の生粋ですわ。文久二年というちょうどそのときが。この刀自体はたとえ刃が少し欠けても、歴史的な意味では昭和の日本史の中で重要な働きをしたんですよ。

○　それ以後毎年士官学校へ行かれるようになったわけですか。

平泉　毎年どころではないんです。その講演を二時間やって帰ってきた。要領は今の通り。満州を見てきたのもそれなんです。満州で日本軍がしっかりやっているという、それはいいと思うけれども、それはてんでんばらばらで国策としては動いていない。日本の弱点は国策が立っていないことで、考えてみると日露戦争以後国策はないんです。政友会と民政党がちゃんぽんになって、西園寺公望がまたしてはあっちをたてろ、こっちをたてろで、行く道が立っていないでしょう。国策なしで満州は出先で勝手に考えている。それが悪いというのではないけれども、最も遺憾な状態なんです。

そして出先は中央をばかにする。中央は出先を乱暴ものとして扱う。これでうまくいく道理はない。それを私が一つにまとめようとする。日本がいま遭遇しようとしている国難に対処するには、全国民が一致団結する以外に道はない。それがてんでんばらばらにお互いに憎み合っているのでは、事はうまくいく道理はない。ところが一つにまとまるためには、陛下の御旗の下に集まる以外にはない。西園寺のもとに集まれといったって、だれも集まるものではない。西園寺のために命を捨てろといってもできない。共産党の徳田球一が立って、みんな徳球のために死ぬかといっても、そんなことは絶対にできるものではない。三井三菱でいくか、そんなことは不可能。陛下のためにということで、はじめて一つにまとまる。これは絶対に必要なことだ。これが私の根本の信念です。そこで問題は出ておるんですよ。それしか私はみんなに問わない。

私のもう一つの意味は、そのためには宮中はしっかりしてもらいたい。これはしかし外へ向かっていうべきことではない。これはどっちも非常に難しい。世間でいうのは、平泉はもう二度と宮中へは行けない。これは宮内官の考えはそうでしょうね。陛下の思し召しだろうと思いますが、宮内官の気持からいえば、ああいうものは二度と宮中へは入れない。それはそれで仕方がない。彼らは彼らでそれが忠誠の道と信ずるならば、それでやっていく。私はそれによって日本の国は血路を開ける道はないと確信する。

この講演をやった二日ほどあとに電話がかかってきた。家内が出て私が出た。東条さんからかかってきた。「東条でございます。これからお伺いしたいと思いますが、お差し支えございませんか」「私のほうは差し支えございません。しかし、閣下はお忙しいでしょうから、何でしたら私から伺いましょうか」、これは会釈ですわ。そのときの東条さんの答えが非常に立派だった。「いいえ、お願いの筋でございますから東条が参上いたします、梅村大佐を帯同してこまいります」「お待ちしております。」やがて梅村大佐を帯同してこられて座敷へ通られた。挨拶があった後に床の間を見ると、ミトノ正勝の刀とこの刀とが刀掛けにかかっていた。「ああ、先日の刀はこの刀ですか」「そうです」「拝見させてください」「どうぞ」これを手に持って非常に喜んで見ておられた。

やがて座へ返っての話が「お願いがございます」「どういうことでしょう」「先生に毎々ご講演をお願いしたいのですが、なかなかそうはいきませんのでお弟子を頂戴したい。お弟子を士官学校の教

官としてお迎えしたい。お話によってよくわかりました、陸軍のいままでの教育は間違っておりました。全部立て直します。ついてはお弟子をください。すぐに全部代えるわけにはいきませんので、とりあえず一名、来年また一名、どんどん代えていきます。まず一名ください。」それから私の弟子がずっと入ったんです。いちばん多いときには八、九人入った。ほかのものもつられて、同じ精神で統一されていく。それで陸軍士官学校というものを全部立て直した。

それまでの士官学校にはこれだけの気魄はないんです。陸軍といっても前の陸軍は高等学校を落ちたもの、高商を落ちたもの、少し学力がないから陸軍へでも行けということで陸軍へ行ったり、いやいやながらそういうところへ入ったりするものですから気魄が違う。そういうものやら、あそこは学問は狭いし、全体の大規模な構想のうちで自分の進む道を開拓して進んで行くというふうではなかった。それから陸軍でも海軍でも役人でもそうですが、みんな自分が偉そうになって、隊長の地位に就くと師団長なら師団長はみんな敬礼を受けて、士官の命令は朕の命令と思えと自分がいうんです。上官は下のものにそれをいうべきではない。おれは陛下の勅命によって動くのだ。自分の意思によって動くのではない。自分はこのとおり陛下に従うんだから、おまえたちも同様に従え。陛下の方を向いて、おれに従って礼をせよとやるべきなんだ。

これで私はずっと押したんです。いちばん私を恐れたのは上のほうの人々です。兵隊は私は関係ない。兵隊にまで手を広げることは不可能です。そんなものはどうでもよい。問題は士官がどういう方向に向かうか、これを全部変えていきたい。それで上のほうの将軍連が私を恐れた。

その時分に、私のところへお歴々から手紙がきています。大将、中将からの手紙がみんな平泉閣下です。陸軍大学校の講義にずっと行きましたが特別講義です。特別講義というのは校長、幹事をはじめとして教官全部が学生とともに聴く。学生というのは大尉、少佐です。教官は大佐あるいはそれ以上。幹事は必ず少将、校長は中将でそれが全部聴くんです。陸大からいつも車がきてそれに乗って行った。その車の運転手が途中で後を振り返って、陸大の特別講義にあなたのような若い者を乗せたことはないというんです、非常に憤慨に満ちていう。「そうだろうねえ、ほかの方はどんな方かしらんが」「いや、それは全部大将です、陸大の特別講義は大将に限るんです。陸軍大将もしくは海軍大将で中将までは下りません。あんたのような若いのは乗せたことはない」「そうだろうね、わしがこれで陸軍にいたら中佐だろうか」と言った。年齢はそのときに三十代の終わりです。ところがその運転手は、あんたが中佐になれるものかと言いおった。（笑）だから、私は一生忘れない非常に名言だね。

私はそんなことは一切頓着ない、とにかくこれを本物にしようと思って行くんですからね。私は陸軍でも海軍でも同様ですけれども官職を抜きにして行く。私は何らの職権を持たない、講義をするだけなんです。だから待遇もまちまちなんです。つまり、私を尊敬してくれる人は閣下扱いするし、何でもない人は何でもない扱いをしてくれる。

一ぺん大しくじりでもやったのは、士官学校へ講演を頼まれた。それで私は行ったんです。これが松村大尉のときはお迎えがあり、一緒に乗って行ったからいいんですが、何も迎えがこないときがあって、私は一人でタクシーを拾って乗って行った。士官学校は今の市ヶ谷のあそこですが、下のほうから上がって行ってこう曲がるでしょう。その曲がり角に衛門があったんです。その衛門まできたところ、そこで本来挨拶をすべきだったんです。

ところが大学でも浜尾御門を入るときにだれにも挨拶せずに入るでしょう。こっちはまた講演の内容しか考えておらん。つい、何の頓着もなしにそのままずっと上がって行ったところ、衛兵が鉄砲を持って出てきて、待てーっというんです。それを私は聞いたものだから、おい、運転手、車をとめろ、待てと言っているぞと言って車をとめた。そこへ銃をもってきて、将校かという。将校じゃないと言ったら衛兵が怒り出した。将校でもないものが車に乗ったまま素通りするとは何ごとだ、降りろという。しようがない、私は降りたんです。降りるときに運転手に、おまえはもう帰ってくれ、あとはわしがやると言って金を与えて車を帰しておいて、それから衛兵と私との交渉になった。

衛兵が、こっちへこいというので、しょうがないから門衛のところについて行った。何しにきたのかというから、わしは校長から頼まれて講演にきたんだけれども、胸くそ悪くなったから帰る、校長にそう言ってくれ。そうしたら衛兵がびっくりして「あんたそんなことを最初言ってくださりゃいいのに」「最初いうも言わんもあるかい。とまれというからとまったんだ。降りろというから降りたんだ。何しにきたか最初から聞いてくれればいうんだけれども、怒鳴られて気持が悪くなったから、わしは帰る」「そんなことを言わんで行ってください」「いや、胸くそが悪いから帰る」と言って、まるで子どものけんかじゃ。何とも言えんおもしろいものでね。そんなことで陸大、陸士へは八、九人行ってましたが、何ともいえない盛んなものであったらしいんです。私は陸士のほうはだんだん手を抜いて、もっぱら陸大でした。陸士は卒業式に陛下が行幸になる。その直前の最後の講義が私の講義です。沖縄で戦死された牛島〔満〕中将が校長のときなどは昭和十七年、二千何百名の学生でしょう。細長いお盆の上に黒豆を並べたようなものです。それが微動もしないでいる、それに向かって私は二時間の講義をする。拡声器なしです。陸海軍とも拡声器を非常に嫌われた。心魂に徹するためには私の声を肉声で聴きたいというみんなの希望がある。

もう一つ変わった希望は、なるべく和服できてもらいたい。羽織、袴で行く。これはみんなの希望で、ほうぼうの講演がみんなそうなんです。つまりひとつの偶像になっている。そのほうが道を説くにはみんなが非常に感動を覚えるんです。そのかわり、二千人に向かって肉声で二時間講義をしてごらんなさい。からだは綿のごとく疲れますよ。ところがえらいもので、聴いておる黒豆はそんな状態でありながらも、全部私の顔を覚える。そのあとはどこで会っても、パッとこうですよ。私のほうはむろんわからんが、向こうはみんな覚えているし、話もみんな覚えておる。二時間の話をみんな覚える

というのは容易ではないんですが、それもノートをとるわけではない、こうして聴いているんです。

たとえば海軍の軍医学校が十七、八年という時分にはみんな南方へ軍艦が行くでしょう。その前に軍医をみんな集めて教練をされて、いよいよ出るときには私の講義なんです。それはやっぱり二時間の講義をするんです。いまみんな院長ですが覚えている。今年の六月に朝早く大ぜい来たから、何がきたんだろうと思ったら、舞鶴の機関学校でお世話になりました第何期生です、みんなで来ましたと言って三十七名ですわ。ここへいっぱい入ってね。この連中はわりに早かった。昭和十三年の卒業でございます。その卒業のときに承った話を、いまもって忘れませんというんで、みんな挨拶をした。一人が、先生、私がひとつ先生のまねをしてみますとやるんですよ。いかにも私の講演にそっくりで。それは人が真剣なときはああいうものなんですね。本当に真剣になったときは何でも覚えられる。私の風貌というものが焼き付いたごとくになる。もっと驚いたのは、先年札幌へ行ったとき札幌の自衛隊の北方総監があります。そこへ行ったところ総監はちょうど留守だった。留守なら仕方がないから幕僚長にお会いしようかと幕僚長に会った。幕僚長は非常に喜んで先生、こられましたかという。これは陸大で教えを受けたんでしょうね。みんなを呼びますから、ちょっと待ってくださいと各部長を集めた。部長が三人か四人きましてね、それが懐しがって、先生と言って私の肩にさわるんですよ。非常にうれしかったですね。そのときにもっと下のもので大隊長級の人がおった。それがきて非常に喜んで、敬意を表して挨拶して、私は昭和二十年五月二十六日の、午後何時何分に新宿駅の階段をおりようとして、のぼってこられる先生にお目にかかりました。それが最後でいまだにお目にかかりませんでした。これを二十年たったあとでいうんです。二十年間これを覚えていたというのは大変なことですね。そういう感銘があるんです。みんなほんとうに何ともいえぬ感動を覚えてくれ、私にもその感動を与えてくれた。そういう関係で陸軍はずっときた。

とにかく戦争が激しくなってから、東大は実質上講義ができない状態です。みんな実際どうなっておるか知らないが、研究室にはだれも出てこない。講義はむろん何もない。自宅おられる方もあるだろうが、疎開でどこかへ行っておられる方もあり、軽井沢へ行っておられる方もあるという状態です。しかし、終戦のときまで研究室はずっと開けて、朝七時からわたしは行っておった。国史学研究室は朝七時からずっとおった。私がいなければ助手がいる。だれもこなくても私は仕事をしておった。私は陸大、海軍大学校、海軍兵学校、陸軍士官学校、海軍機関学校、霞ヶ浦、それから各部隊からきてほしいでしょう。それを都合つけて全国回ったけれども、東大の正規の時間はひとつもはずしておらん。

東大の講義は火～木曜に集めて、この間は東大におる。講義はずっと続けた。そして講義のないときでも自分の可能な限りは、研究室に勤めておった。海軍でも陸軍でも研究室へきて、私といろいろ交渉した。そういうことで終戦になった。

終戦になったものだからやむをえない。即日辞表をしたためたが

提出すべきところがない。だれもいない。そこで十五日も十六日もだめで、十七日に教授会が開かれた。そこへ出て行って私は黙って座っておった。みんないろいろなことを言われた。じっとみんなの顔を見、みんなのいうことを聞いたがいうべきことはない。

そこで教授会が散会したときに、学部長は社会学の戸田〔貞三〕さんですから戸田さんの部屋へ行って辞表を出した。そのときの戸田さんは非常にあたたかい立派な態度でした。わかりました、平泉さん、とにかく自由にしばらく休んでくださいと言われた。

私は辞表を出すと同時に、「勅任官は勅許を得ずして任地を去ることを得ず」という個条があるでしょう。こういう非常な事態ですから郷里へ帰りますから、これはとくにお許しを願いたい。結構です、ゆっくりお休みください、静養しておいてくだされば、そのうちに私がお迎えにあがります。これはとにかく私がお預かりしておきますということで、戸田さんが処置してくださった。家はもう焼けてないんです。

同時に戸田さんにもう一つお願いがありますのは、こういうときですから私の持ちものが研究室にありますけれども、持ち帰ることが不可能です、預かってくださいませんかと言ったら、ご心配なく、いつまでも置いてください、少しも差し支えありませんということで、この二つのお許しを願っていとまごいをした。

私の退官願いは何かに残っていますか。

○　十月に受理したという・・・。

平泉　それはそのときになって、このままおけば追放にかかると見て、戸田さんが処置してくれたんです。ものは十五日に出ておる。その文章はどういうものか知っている人があって、葉書に刷って年賀状でばらまいたんですよ。

退官願　皇国空前の大厄難に遭遇して奉公の誠たらず、護国の力少なきを慚愧し、恐惶の至りに絶えず、慎んで本官を拝辞し奉りたき存念に御座候、何卒ご聴許給わり候様懇願奉り候　昭和二十年八月十五日　東京帝国大学教授　平泉澄　内閣総理大臣男爵　鈴木貫太郎閣下

これは異例の願書で鈴木さんに宛てるべきものではないんです。それは、わしはほかのもので処置されるのはいやだから、宛名としては総理大臣に処置してもらいたいということで事実はどうなっても、宛名は総理大臣にしたんです。そして帰ったんですがね。

戦争が順調に進んでおったときはみんな親切であった。教官といい何といい私に親切で、たとえば真珠湾の大勝のときなどは教授会に出ると、辰野〔隆〕さんなどは私の肩をたたいて、平泉さんおめでとうと、まるでわしがしたようにいう。それは特別の関係があるんです。真珠湾は霞ヶ浦航空隊の働きで、航空隊は昭和十年に行って講義をした。それが非常な感銘だったんです。後へひびくんですけどね。その霞ヶ浦から私へ頼むのに辰野さんを経由したんです。教頭が有名な大佐で、あとで中将になりますが、この人が辰野さんと同期生なんです。辰野さんを介して来てほしいということで、それで行ったんですよ。そういう関係もあって辰野さんは、おめでとうございましたと言ったんです。

それから戦争が悪くなってくると態度ががらっと変わる。みんな、平泉は悪いことをしよるという風になったんです。いちばんおもしろいのは法学部長の田中耕太郎氏。私のライバルみたいな人で、あれは尺貫法の問題で尺貫法を容認すべきか、それともメートル法に統一すべきかという問題のときに、メートルをもって統一すべしというのが田中耕太郎。私は、日本人の頭脳はメートル法一つしか覚えられないような貧弱な頭脳ではない。メートルもやればよい。尺貫法も併せ用いてよい。そのほかヤード・ポンドも用いてよい。そんなことによって日本人がどうにもならんような状態になるほど貧困な頭脳ではない。日本の伝統は日本の伝統で保存せよ。貿易の上で必要ならばヤード・ポンドを使えばよい。メートルも使ってよいというのが私の議論です。そのときの内閣の委員はお歴々を網羅した五十人で、そのときの局長が岸さんです。

岸さんは私の家へきて、こういうことだから出てきてくださいという。「どういう委員の構成ですか」「メートルが二十五名、メートル反対が二十五名という構成です」「会を開く必要はないじゃないですか、五分五分では何も決まらんでしょう」と言ってやったら、「そうじゃないんです、世間がうるさいからこうなっているんです」ということでした。そのほかに各省の次官が入り、政府のほうも入る。それで何とかかたをつけるつもりだというので、しょうがない入りましょうと行ったんです。

そうすると大ぜいですから、ずらっと委員が並ぶ。壇上には商工大臣町田忠治、鮮かな議長ぶりでした。議長の挨拶があり、やがて、メートルを主張する人・・・・・・。

○　昭和十年度量衡制度調査会。

平泉　それそれ、十年ですか、若い時ですわ。私の四十の時です。商工大臣が総会の席上である人を氏名した。その人が立ってメートル法を主張した。その次に私を指名された。私は堂々と尺貫法の存続を主張した。そうしたところが町田議長が「それでは総会はこれをもって打ち切りといたしまして、特別委員会に付託することにいたします」　そうすると「反対ッ」と言ったのが田中耕太郎。「それではご意見もございましょうから、多数によって決めることにいたしましょう。これをもって総会打ち切りに賛成の方はご起立を願います」。みんな立ったんです。田中耕太郎は立たないんです。立たないのを見て、田中が立たないのならわしも立たない、けんかならこいというんで私も立たなかった。この二人が立たない。いよいよ議論になれば、とにかく田中と私しか対抗できるものはない。そこで特別委員会に付託されたでしょう。特別委員会はつまり田中と私の決戦になるんです。田中の味方をするのは山本五十六と何人かありました。極力私を援助して同感であったのは建築の伊東忠太先生。立派な先生ですね。伊東忠太先生は、日本の建築は尺貫できておるんだ、これをつぶすとは何ごとだ。あの先生は偉いんですよ。学士院会員になったときに名簿があって署名するんですが、それは日本字を書いて横へローマ字を書く。ローマ字のときにはみんな名前を先に書いて苗字を後へ書く。ところが伊東先生は頑としてそれには応じられない。おれはイトウチュウタだ、チュウタ・イトウで

はないんだということで、どうしてもチュウタ・イトウとは書かれなかった。これは先生から直接承ったんです。

もう一人、私に尺貫法を援護してくださったのは、平山清次先生、天文学です。私はどんな場合でも天文学と気が合うんです。後では今度亡くなった京都産業大学の総長荒木俊馬先生、これは私の兄弟分ですわ。あの人も戦争が負けたときにすぐに辞めたんです。荒木先生はここにすぐこられて、三、四日おられましたよ。非常に天文学と気が合う、不思議なものですね。

同じ建築でも伊東先生はそうだったけれども、何とかいうのは一生懸命尺貫法で騒いでいました。

田中耕太郎氏は、日本が戦争に勝ってくると神妙な顔をしておる。日本が負けてくると非常に愉快になってね。東大にもずいぶんそういうのはおったんですよ。ここまで負けることが好きなやつがいるのではしょうがないと思っておったが、いよいよ負けてマッカーサーによって蹂躙されたあとで東大へ行って、負けることを喜んだ連中に会ったら何も言わない。「あんた、楽しいですか」「いや、楽しくありません」。それでもう何もいうことはない。

田中耕太郎はそのあと文部大臣になり、最高裁の長官になったでしょう。私は何年も会わずにおったところが、あるとき鹿島の会で偶然彼と一緒になった。鹿島にご馳走の出る会があって、それに行ったところが彼がきておった。わしは別に鹿島へ行く気はないんだけれども、うちの三男が鹿島の娘をもらっているものだから、親類だからしかたない、来てくれというので行ったんです。そして行ったところが、田中耕太郎は一生懸命ビフテキを噛りついているんですよ。やあ、田中氏がいるなと思ってそばに行った。彼は食べるのに一生懸命で、わしがそばにおっても気がつかない。一生懸命かじっていた。しようがないから食べるのを待っていた。ムシャムシャ食べて顔をあげたところで、「田中さん、平泉です」・・・それが何とも言えぬ顔をして、彼は一語も発しなかった。

大学で私を喜んでくれ、私が正門を入ると、ああ、先生が、見えたと言ってくれたのは門衛。正門に門衛の詰所があるでしょう。あそこに柔道の猛者が大ぜい集まっておった。その連中は非常にわしを好きでね。わしが門を入ると、あっ、来られた。出ると、あっ、帰られたって。どういうのか知りませんがね。何らわしはあそこへ寄ったこともなし、知らんはずなんですけど、懐しんでくれました。彼らが転任するときは挨拶にくる。不思議なもんですね。

おもしろいのは百貨店の娘が転任するとき挨拶にくる。どういうんでしょうね。銀座の松屋の女の子が、先生、今度私は売場がかわるからと。

○　その寒林年譜というのはどういうものですか。

平泉　これはわしの年譜だけれども、門下生にあらざるものには示さん。私の門下生というのは全然意味が違うんですよ。死生これを共にするというところまできておる。それは陸軍でも海軍でもみんなそうです。ふつうのちょっと教わったという関係ではないんです。（夫人出席）

家内は方々からうらまれていることがあるんです。それは私が当

時はやりつ児ですから、十数年の間というのはちょっと私の時代がありますわいな。講演を頼みにくる、断わるのは家内なんです。

――あのとき奥さんに門前払いくったんだって、いまごろ叱られますよ。

平泉　とにかく私の体は一つですから、相手を選ばなくてはならない。東大は決まったもので、そのほかはよほど選ばないと体がもちはしませんわ。本当に大変ですよ。東大で火水木と講演をして、木曜日の夜汽車に乗る。あの時分の汽車はのろいですから、金曜の午後広島へ着いて、それから汽車を乗り換えて呉へ行って船に乗って江田島へ夕方着く。ひと風呂浴びてご飯を食べて夜講義をする。土曜の夜また講義をして、日曜の午前中講義をして、昼ご飯を向こうで食べて、すぐ船に乗る。それで東京駅に着くのが月曜日の朝で、家へ帰ってご飯を食べるとすぐそのままタクシーを飛ばして陸軍大学へ行かなければならない。陸軍大学は十時からなんです。それはとても大変なことです。

――その時分お灸を二百ぐらいすえたんですよ。背中じゅうお灸でカチカチ山の何かみたいになってるの。弱かったですから、しょっちゅう風邪もひきますし、あの時分皆さんがすすめてくださって、日本でいちばん偉いお灸の先生にね。

○　それは一般に健康のためということですか。

平泉　そうなんです。

――今でもよう風邪をひかれます、それに太ったことがないですからね。

平泉　私の家は曙町のずっと奥へ入ったところで、細い道がずっとあってその奥に私の家だけがあった。ある時、門の前を掃除をしておったら、地方の教育会の幹事が私のところへ講演を頼みにきたとみえて、私を捜しているんです。「平泉先生のお宅はこの奥でしょうか」「そうです」「先生はおいででしょうか」「いや、いまお留守です」。（笑）しょうがない。

――皆さんはもっと年寄りだと思っていたんでしょう。あの時分は四十過ぎぐらいですかね。

平泉　いちばんおもしろいのは、陸軍大学校へ行っておる時分に校長が替わったんですが、替わった校長をまだ知らんから挨拶しようと副官に申し込んだんです。校長がお替わりになったそうで、ご挨拶申し上げたいと思いますが、取り次いでくださいと名刺を渡した。副官は校長室へ行って取り次いで来て、どうぞと言って、それだけで副官はどこかへ行ってしまった。私は行けばいつも校長応接室を私の控え室にしていて、陸大へ行ってもほかの教官と一切顔を合わせない。全然別格なんです。

その校長応接室において、校長の部屋へ行ったところが、校長はドアを開けてドアのところに立っておられる。手には私の名刺を持っておられる、副官が届けたからね。それで私がそばへ行ったところ、校長は私の言葉を聞かないうちに、ちょっとお待ちくださいという。しょうがないから私は横へよけて待っていた。ところが校長は外へ出て廊下をあっちこっち見てもだれもいない。それで私を見て、「あなたは平泉博士ですか」「そうです」「ほう、お幾つですか」。

（笑）私はその時分に四十三、四でしょうかね。それで言いました。ほう、私はまた平泉博士というのは八十幾つの白い髯がフワッとしておる方かと思いました。いや、まだそこまでいきません。

それから石原広一郎さんなんかもびっくりしていました。この人はシンガポールの攻略に関係したんです。シンガポールの要塞の状態を探るのはこの連中です。苦力になってみんな入っているんですが、この人が私を見て驚いたと言っていましたが、年が若いので見当もつかなかったんでしょう。今よりもまだやせていたんです。それから終戦後ここへ帰って来て。紋三郎が来たのは何年だろう。

――八月に帰って、あれは翌年です。あなたの誕生日。

平泉　雪が降ってね。大雪だったんですよ。勝山まで出られない。その雪の中、みんなで雪おろしをしているところを女が一人で来たんです。それが東大の歯科の金森〔虎男〕教授の紹介を持って来たんです。お願いの筋があって加藤ふさえが行くからよろしく頼むという電報がきた。そして彼女がきた。これは年が二十五ぐらいで新橋の芸者です。何しにきたんだろうと思っていたところ、日本の国は戦い破れた後には、精神的にも打ちのめされて、このままでは日本の国は成り立っていかない。何とかして日本が精神的に立ち上がるようにしなくてはならない。それはどういう方策を立ててどういう方向に向けるべきであるか。これをひとつご指導願いたい。

これは堂々たる男子が考えるべきことだ。男子はそれを考えないで自分の衣食に汲々としておるときに、一芸者がこれを考えてきたんですよ。驚いてね、とにかくおあがりとあがってもらった。雪が深いので一切出られないんです。一週間ほどいたね。

――はい、ちょうど一週間です。

平泉　とにかくそれは口先だけで言っていたのではだめで、学問をしなくてはならない。それからわしの書物、「武士道復活」を読め、「伝統」を読めで、これはすばらしい、小学校三年までしか行かない人が全部読んで完全に理解して、さらに進んで吾妻鏡までやった。驚いたね、吾妻鑑の演習といえば私のは東大で有名な演習でね。その当時、あちらこちらの大学で吾妻鑑の演習があったが、わしのような演習のやれるものはだれもない。非常に楽しいんですわ。みんなもギュウギュウいじめられたんですが、水際立ったものだった。それをそのふさえさんにもやってみた。みんな覚え、完全にこれを読破していく。

――小さい人なんですよ、細いきれいな人で、雪の精みたいな白い顔で。

平泉　踊りが上手な何ともいえぬ、空中を舞うんです。足が地についていないで空中を舞っているような、何ともいえぬ楽しい・・・。

――楽しそうに舞う人でした。

平泉　この人のことは私は今でも忘れないですね。これだけの人が芸者におる。これは不幸なことで、あといろいろやってたんですが、結局、堂々たる男ができないことを芸者の一人が考えたところでどうにもなるものではない。結局何もならないで、とうとう一家自殺して果てたんです。

――十二月二十七日なんですよ。だれも弔う人がないから、私はその日だけは覚えているんです。

平泉　うちで弔ったんですわ。

――思い切った人で、あれは一種の人間と何かの間ぐらいの人ですよ。雪なんかを落すのに、フワーッと上まで飛んで、上の雪をたたき落としてくれるんです。だから義経が八艘跳びをしたというのも不可能ではないと思いましたよ、その人を見てて。あんな人はないですね。

こっちへこられて寒かったでしょう。

○　覚悟してまいりましたけれども、それほどでは。

――この辺としてはこれは変なほど暖かいんですよ。いつも雪になるんじゃないかと恐怖してるんですけどね。私はあまり雪のほうを知らなかったものですから、最初は喜んでいたんですよ、雪できれいだって。そのうちおそろしくなってきました。

○　奥さんはおくにはどちらですか。

――私は大阪の町の子ですから、主人にいつでも町人はと叱られています。

平泉　これは刀箪笥ですよ、二つある、これは異例ですね。一つでいいんだけれども二つ重なってある。

○　上の潜水艦は何か。

平泉　あれは特殊潜航艇。これのもう一つ先が回天。その回天は私の最愛の門下、黒木〔博司〕少佐。

――あの方なんかあなたに会わせてあげたい人ですわ。そのときにうちに小さいお手伝いの子がいたんですが、その人が忘れられん顔だと言っていました。高貴な感じで死を覚悟している人の顔なんですね。

平泉　この人の日記は「少年日本史」にも書いておきましたけれども、一年間血で書かれたんです。こんなものは国史二千何百年の中にないですよ。驚いたものですね。そしてついに回天でアメリカの戦艦、空母を破砕しようとした。

海軍の主流は私と反対なんです。山本五十六、米内光政。

○　岡田さんはどうなんですか。

平泉　初めは私のおじのような人ですけれども、これは反対。戦争は無理だから手を上げろというんです。非常にしゃくにさわるのは、戦争が負けた後、アメリカの裁判を受けるでしょう。そのときの検事がキーナンです。そのキーナンが岡田大将と米内さん、宇垣大将、若槻礼次郎を招待するんですよ。どこか熱海のほうでね。彼らは得意になってその招待に応ずる。その記録があるんですが非常な喜びで、われわれに対してかくも懇切な待遇をたまわることは感謝にたえないという。それは副官が迎えに行ってみんなそれぞれついてきてお迎えして、至れり尽くせりの招待だったし、ご馳走してもらった。こんな美酒佳肴にわれわれは触れたこともないと言って、みんな酒を飲み、帰りはまた自動車で、それぞれ副官が付いてお宅まで届けた。

それが私は憤慨にたえないのは、その時に一方では東条、板垣の死刑が行われていたんですよ。自分の同僚が殺されるときに、招待

を受けて酒を飲み、喜びを極めるということは、人間のすべきことではない。これは罵詈讒謗してやりたいと雑誌に書いたんです。それは何とも言えないものですね。岡田さんにはいいところもあった。しかし、根本は間違っておる。米内さんもそうだと思う。情ないですよ。

○　末次〔信正〕さんはどうですか。

平泉　末次さんは終始いじめられ通しですわいのう。

○　石川信吾。

平泉　これもあとは気の毒な死に方ですわ。

○　さっきの先生のお話で、軍の上層部つまり将軍連は先生のおやりになっているようなことはあまり好まないというお話しでしたが、将官の中にも支持者はおられたわけでしょう。

平泉　実戦しておると、わしのところへくるよりほかはないわけです。米内さんなどは戦争に一ぺんも出たことがないし、岡田さんも宇垣さんも実戦には出たことがない。実戦をやってみると彼らが地図で考えているようなものではない。下の人はみんな私によって動くというくらいの勢いなんです。それが海軍としては非常な不幸でしたね。陸軍は上層部もみな私を信頼してくださり、言っては悪いけれども東条さんでも小畑〔敏四郎〕さんでもそうですが、あとでいえば陸軍大臣阿南大将、これは入門願書を出されたんですよ、私に対して。それから下村大将が最後ですがね。手紙には最末の門人、下村定と書いてありますよ。全然態度が違うんです。それで下村大将はここまでこられたんですよ。知れればふたりとも絞首刑です。マッカーサーがきた直後ですからね。それを忍んでこられて相談があったんです。そのときに困ってね、これをいかに指導するかというのが問題ですわ。そこで汽車を福井で降りられてからここまで電車に乗ることは禁物なんです、危ない。そこで汽車を降りられたらすぐ、自動車にお乗せしてここまで黙って連れてきたいが、自動車が私にはないし、その時分は今のように自動車がどこにもあるわけではない。極めてまれなことです。

そこで、知事が小幡〔治和〕さんでこれは昔の門下。それで小幡さんのところへ行って、大事なお客があるので済まんが自動車を貸してもらえませんかと言ったら、結構です、お使いください。念の為にそれからもし平泉寺までくる余裕がないので、福井で会合するということになれば、しかるべき所を借りなくてはならない。こっちは金が一文もない。それで料亭で周囲に邪魔の入らないような広い所を借りなくてはならないが、そんなことは私にできない。そこで福井銀行へ行って副頭取に会った。この副頭取がわしの知己ですわい。

話を前に戻しますが、世界は大動乱に陥り日本は大国難に遭遇するということを私は看破して、欧州滞在を切りあげて帰る、前から日本は大変なことだと思っていたが、いよいよそれがせっぱ詰まってきて帰るでしょう。同じ時にヨーロッパにおって、これは大変だということに気がついて、そこで対策を講じなくてはならないと考えたものが、私のほかに二人ある。これが世にも不思議なことに、全部大正七年の東大卒業生です。大正七年というのは東大の〔聴取不能〕

でちょうど［聴取不能］。

そのときに出た一人は仁科芳雄。これが理工科の銀時計です。欧米へ行って、原爆をもって国を守る以外にはないということを考える。もう一人は石井四郎陸軍中将。これは石井部隊ですが私と四高で同期生ですが、厳密にいうとこの人は医学部だから昭和八年東大の卒業だと思うんですが、仁科さんもわれわれも大正七年には東大におったんです。

この三人は連絡はないんです。私は仁科さんは知らん。石井さんは知っておったが、石井が偉い男だということは知らなかった。ある時、陸軍軍医学校で講演を頼まれて、行ってした。石井さんがおって挨拶をした、おう、石井さんといったんですよ。そうしたら別の陸軍少将が私のそばへきて、この人は石井さんと気軽に呼べるような人ではないんですと注意してくれた。戦争が一つあれば必ず一つの発明があり、勲章が一つ増える、それが石井閣下ですよ。ああ、そういう偉い人ですかと初めて石井というのは偉いものだと思った。

そのうちに石井さんの本当のことを全部私は知ってね。これは大変なことだと思った。化学兵器をもって国を守るんです。陸軍の最後の手段はこれだった。非常に厳重にこれは秘匿されておった。しかし、いよいよ戦局が急迫したとき、私は石井さんを訪ねた。陸軍大臣には会えても石井さんには会えないというくらい全部守られておる。それを石井さんに連絡したら、おいでなさい、話しておくということで会いに行きましたわい。全く隔離されたところで、厳重な警戒のうちにおる。会って石井さんが言うには、あなたはみんな知っておるんだから隠すことはしない、みんな話しする。おれのところで考えておることはこれだけだというんで、全部の計画、準備、設備、みんな話をしてくれた。石井さん、いざというときは頼むぜというので、非常にこれは自分には頼みになった。

もう一つの原爆のほうも頼みにしたんですが、これは貴族院でたびたび長岡半太郎氏がしゃべった。あれがよけいなことをしゃべった。やるのなら黙ってやればいい、できもしないものをしゃべるというのはよけいなことなんです。よけいなことを言われたなと思いますが、これは結局できずに終わった。

そのときに仁科さんの下におった人が二人ばかり、この春、テレビに出たんですが、その話を聞いて私は非常に憤慨したんです。われわれは仁科博士の下で原爆の研究に従事したけれども、それは原爆をつくって実戦に用いようという意図ではなかった。自分らがこのことに関係しておったのは、いかにして陸軍の徴兵を免れかるかということを考えて、そのためにここに入っておったのだ。研究するものは理論を研究したのであって、実際には関係しておらんと繰り返し言ったんです。それはどこまで本当なのか、今の時世に媚びて言ったのかわしはわからん。しかし、事実は何もできなかったんです。当時、もう一週間早ければできたというが、事実はそんなものではありません。五十年も遅れていたんですと言いました。いまさら何を言うかと思いましたがね。本当に自分の命を捨てる気のないものは、こういうことになるんです。石井さんのほうは用意して

おったが、これは陛下のお許しがないので、とうとう行われない。そこで何とかしてふつうの兵器で戦って、いわゆる逆転を私はやりたい。私はプロレスが好きでね。猪木がさんざん負けて、これはあかんかと思うと、彼は逆転する。それは何とも言えぬ楽しみですわ。それはどんなに負けても最後の一戦で勝てば、終わりよければ万事よしなんです。それで回天でも何でも一生懸命やった。

気に入らん人は大ぜいおったけれども、米内のいちばん信頼したのは井上〔成美〕大将で、これがあと海軍次官で、それまでは兵学校長をしておった。わしが情けなく思ったのは・・・（録音に入っているのか、どうしたもんかいな。外へいうことはおやめなさい）私が兵学校へ行ったんです。食事は校長と教頭と私の三人ですることにいつもなっておる。その時間になったので部屋に行った。そうしたらカーテンの陰で校長と教頭と話をしておって、校長が教頭をたしなめておる。こっちは耳があるから聞く気はないけれども聞こえる。仕方がないから聞いた。おれは勲一等だ、帳面を見ろ、歴代の校長の中に勲一等の校長は一人もおらない。しかるにおれは勲一等だ。してみればおれに対する待遇は従来の校長とは違うべきはずだ、おまえはそれを心得ろという訓論をしておる。

私どもはいまだかつて勲章をもらおうと思って働いたことは一ぺんもないのに、何ということだろうと思った。しかし、私が非常に感謝することは、黒木さんの日記などは海軍次官の責任保管ですが、終戦で海軍省がいよいよなくなるときに、全部私に渡してくれた。これは非常にありがたく思っています。焼き捨てもせず、変なところへ処置しないで、私のところへ送り届けてくれた。これは井上大将のほとんど唯一の功績です。（終）

（校訂　照沼康孝）

彙報

東京大学史料の保存に関する委員会彙報

第四十八回　平成11年7月13日（火）

議題　一、東京大学史料の保存に関する委員会委員の交替について
二、東京大学史史料室の教官の人事について
三、英文版「年譜」編集の進捗状況について
四、東京大学史史料室の利用状況等について
五、その他

摘要　議題一については報告があった。
議題二については、室長より、史料室助手の任期満了及び助教授への昇任について説明、提案があり、最終的には教育学研究科の教授会に了承を得た上で11月1日付けで発令になる、との説明があった。
議題三については説明が行なわれた。
議題四については、史料室業務の報告があった。
また、室員の行なった海外出張の訪問先と目的について、今後のプロジェクトの説明、及び史料室のホームページの進捗状況の報告があった。

第四十九回　平成12年2月22日（火）

議題　一、平成12年度東京大学史史料室予算（案）について
二、英文版『年譜』の編集について
三、東京大学史史料室の利用状況等について
四、その他

摘要　議題一については説明があり、質疑が行なわれ、承認された。
議題二については説明が行われた。
議題三については史料室業務の報告があった。

○東京大学史料の保存に関する委員会委員の交替

・平成11年4月1日付
「東京大学史料の保存に関する委員会委員名簿」
参照

○東京大学史料の保存に関する委員会委員名簿

委員長　○高橋　進（大・法・教授）
委員　◎栗田　廣（医・教授）
〃　○鈴木博之（工・教授）
〃　○野島陽子（文・助教授）
〃　○岩澤康裕（理・教授）
〃　○谷口信和（農・教授）
〃　○小野塚知二（経済・助教授）
〃　○三谷　博（教養・教授）
〃　○土方苑子（教育・教授）
〃　◎折原　裕（薬・助教授）
〃　○都司嘉宣（地震研・助教授）
〃　○髙橋昭雄（東文研・助教授）
〃　◎落合卓四郎（図書館・館長）
〃　◎板橋一太（事務局・局長）
〃　◎羽田　正（総長補佐）
〃　◎横山伊徳（史料・助教授）
幹事　○中村好一（総務部・部長）
〃　○谷口辰男（経理部・部長）

※◎印は4月1日付けで交替した委員
○印は継続の委員